

令和5年度 島根県立松江養護学校 学校評価表（評価結果）									
学部等	評価計画		自己評価				学校関係者評価		
	めざす姿	評価指標	実績	評価	分析・評価・達成状況	次年度に向けた課題・方向性	評価	意見	
小学部	【児童】 ・興味関心の幅を広げ、地域の中で五感を働かせて意欲的に活動しようとする姿 ・身近な教員との信頼関係を基盤にして地域の人や友達に自分なりの方法で関わろうとする姿	【児童】 ・児童が、地域の自然や資源を活用した体験学習に興味関心をもち、意欲的に活動することができたと感じた教員80% ・児童が、地域の人や友達との活動に自分なりの参加の仕方できかわることができたと感じた教員80%	100% 97%	A	・児童の目指す姿の評価指標の目標80%に対し、100%と97%であり、目標を達成できたと考える。 ・各学年・学習グループ・学級単位で実践をすすめ、新規事業もたくさんあった。特に外部講師との活動をくりかえす中で、学習への意欲や理解、人とのかわりが深まった。	・今後も地域との協働の取組を続け、児童の体験学習や人とのかわりを深めていく。 ・生単の年間計画を、学年の段階に応じて整理していく。	A	・先生方の地域へ向かうエネルギーのようなものを感じた。子どもともに興味関心が広がっていく質的向上への視点をより強くもたれながら実践されていくことを期待する。 ・学校行事や地域の人と触れ合う教育活動が着実に展開されている。 ・地域との協働学習の際に「場や状況に応じた振る舞い」ができ、成長でき良かった。 ・地域の人に思いを伝え、理解者を作ることができて良かった。 ・寄宿舎の活動では生徒の力を発揮させるものとなり良かった。地域の子どもたちも多数参加し、とても喜んでたし、寄宿舎の生徒も生き生きしていた。	
	【教員】 ・地域の人、もの、事を活用し、児童の興味関心を広げようとする姿	【教員】 ・地域への興味関心が広がるように活動を計画実行できたと感じた教員80%	76.8%	B	・教員の評価指標を「計画実行」としており、自分が計画実行までを担ってはいないと教員が感じている場合もあると考えられる。				
中学部	【生徒】 ・地域の中で必要な習慣や技能を身につけようとする姿 ・互いのよさを認め合いながら、地域とかわらうとする姿	【生徒】 ・地域資源を取り入れた活動を通して、生徒達が「地域とのつながりや関心を高めた」、「場や状況に応じたふるまいをした」、「地域の中での役割や責任に気づいた」ことができたと感じた教員80%	100.0%	A	・年間指導計画に基づき、校外での活動などを通して、地域資源を取り入れた活動に取り組めた。 ・校外での活動を通して、生徒たちは地域とのつながりをもつことができた。また、公共の場では静かに過ごしたり、集団で行動したり、適切な言葉づかいで話したりする姿も見られた。 ・今年度も川津公民館を定期的に利用した。風船がずらのグリーンカーテンづくりやトイレ掃除など、地域の中で生徒たちは持てる力を発揮し、地域貢献をする活動にも取り組めた。	・地域資源を取り入れた活動の中で身に付けたい資質・能力を授業の計画段階から明確にし、実践していく必要がある。 ・生徒たちが主体的に課題発見、課題解決できるようにするための授業を計画していく。 ・取り組んできた地域活動を継続していく。	A	・地域の伝統文化の取組も子どもたちの成長につながっている。 ・子どもの思いや気持ちを大切にしている結果が子どもの自信や「やってみよう」という思いに繋がっている。さらなる実践が楽しみである。 ・生徒アンケート調査が困難な場合もあるとのことだった。実際は数値以上の実績があるのではないかと感じる。 ・教員アンケートの結果より成果を感じる。経験や外部との交流の実績データが蓄積されることで教員の皆さんの負担が減っていくと思う。 ・生徒の表情からも当初の目標が達成されていると感じる。 ・日々生徒の成長に向け力を注いでもらい感謝。 ・生徒がアンケートで「いいえ」を選択した本当の意味を評価するとよい。 ・学校の取組を保護者としてももっと発信していきたい。	
	【教員】 ・教育活動に地域資源を積極的に活用する姿	【教員】 ・地域資源を取り入れた活動を実施できたと感じた教員80%	91.7%	A	・学級・学年活動、体育（フライングディスク）、音楽（川津ふるさと太鼓、県立大学合奏部）、作業学習（サンラボーむらこも、本庄道の駅、松江刑務所他）など、外部講師を招いたり、地域に出かけたりする活動に、概ね、実施できた。 ・自分の持ち授業の中では、地域資源を取り入れた活動を計画・実施することができなかった教員もいたと考えられる。	・どの教員も地域資源を取り入れた活動を計画・実施することができるように、教員配置を工夫したり、意識が高められるような発信や共通理解をしついでいく。			
総合高等学校	【生徒】 ・地域に関わろうとしたり、思いを伝えたりする姿	【生徒】 「地域を活用した学習に取り組んだ（取り組もうとした）」 「地域の人に思いを伝えた（伝えようとした）」 「地域の人に喜んでもらって嬉しかった」と感じた生徒が70%	85%	A	・総合的な探究の時間の学習や修学旅行の事前・事後学習で松江・川津・鳥取について調べて、実際に見て体験し学んだことをまとめて松養まつりでしっかり発表することができた。 ・販売会やMカフェなど、計画的に実施することができたり、生徒主体の販売会議を定期的に設定したりして、積極的に販売会に参加しようとする生徒の姿が見られた。また、平日の販売会を定期的に設けたことで、参加できる生徒の幅が広がった。	・今後も生徒達が地域に出かけて様々な取り組みができるように、今年度継続してきたことを次年度にも引き継ぎつつ、生徒の実態に応じた販売会の参加の仕方を検討していく必要がある。 ・今年度、障がい者スポーツに取り組んできたが、今一つ盛り上がりにかけていたところもあった。2030年の国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会に向けて、来年度以降、障がい者スポーツに力を入れて取り組んでいきたい。	A	・地域課題の解決につながる有意義な活動内容になっている。さらにホームページでしっかり発信されている。 ・産学多方面からの参加者による協議を通して、幅広く意見が交換できたことは大変有意義であったと思えます。 ・今年度の積極的な地域との交流を知る事が出来大変感心致しました。特に公民館を通じての地域社会及びご老人との接触はこれから社会人として働く上での良い勉強に成ると思います。	
	【教員】 ・意見を出し合い、ベクトルを合わせて地域と積極的に関わろうとする姿	【教員】 ・生徒の実態に応じた活動や作業内容を考えて、地域と協働することができたと感じた教員80%	87.9%	A	・地域との協働にむけて、販売会の年間計画や話し合いの時間を定期的に設けたことで、支援や作業内容等について情報共有しながら取り組んだ。 ・販売会の年間計画をもとに、販売会に参加する教員を作業班ごとに割り振り、多くの教職員に販売会に参加してもらうことで、地域との関わりを経験してもらええる良い機会になった。	・今後も定期的な話し合いの時間を設定していくことで、販売会への参加が難しい生徒たちの参加の仕方等、生徒の実態に応じた活動や作業内容を検討していく。 ・販売会だけでなく、障がい者スポーツも地域と協働して取り組んでいくことが課題である。中学部との連携したり、体育の先生方に協力してもらったりしながら取り組んでいきたい。			
職業高等学校	【生徒】 ・地域の方とのかかわりの中で日頃の学習の成果を発揮し学習を深めることで、地域のよさを知る姿	【生徒】 ・「地域を活用した学習にもっと取り組みたい」「地域の人ともっとかかわりたい」と感じた生徒が70% ・「現在や将来、地域の中で自分の力を生かすことができる」と感じた生徒が60%	87% 76%	A	・生徒アンケート結果から、生徒たちは「やりがいをもち取り組んでいる」「自分たちの成長を感じている」「地域への感謝の気持ちが芽生えている」ことがわかる。教員から見ても生徒の自主性、責任感があがったと感じている。 ・「現在や将来、地域の中で自分の力を生かすことができる」と聞いた「いいえ」と答えた生徒もその理由として「もっと取り組める、もっと関わりたい。」と現状に満足していない意見もあった。「いいえ」と答えた理由、深い意味を聴いていく必要がある。	・次年度以降も年度当初に計画を立て、見直しをもち、また持続可能でより深い教育活動になるように、ブラッシュアップしながら取り組んでいく。	A	・9割の生徒の皆さんが「もっと学習に取り組みたい、もっと人と関わりたい」と感じており、目標に対して大きな手ごたえのある素晴らしい結果だと評価する。生徒の皆さんのもっと、という向上心が醸成されることにも大きな意義があり、その進め方は絶妙な塩梅であったと思う。 ・すべての教員が地域との協働実践に関わることは難しく、評価計画・指標等を今後どのようにしていくかは検討する必要がある。 ・企業の経営層が多く利用しているSNSはフェイスブックである。それを活用することにより松江養護学校が地域に広く開けていること、地域課題の解決に寄与する様々な活動をしていることをより多くの経営者に知ってもらえると思う。実習の受け入れに繋がることも期待する。	
	【教員】 ・地域との連携や協働した学習を企画することで、本校について啓発し、地域や地域の企業とかかわりを深めようとする姿	【教員】 ・地域を活用した学習が本校の啓発や、地域等とかかわりを深めることに有効だったと感じた教員が75%	100%	A	・教員の意見には地域の方の反応の温かさを今まで以上に感じ、地域との協働学習の成果を感じている意見が多くある。 ・業務量に配慮しながらこの活動を推進し、学校の啓発と共生社会に実現に向かいたい、という考えも多い。				
安来高等教室	【生徒】 ・地域の方と自分なりの方法を見つけ、かかわれる姿	【生徒】 ・「地域を活用した学習にもっと取り組みたい」「地域の人ともっとかかわりたい」と感じた生徒が70% ・「現在や将来、地域の中で自分の力を生かすことができる」と感じた生徒が60%	100% 100%	A	・総合的な探究の時間を柱に、交流センターの方からの要望を取り入れそれぞれの交流センター別の企画をした。生徒達がチラシを準備したり地域の方と関わったりする姿を多く見ることができた。活動後には交流センターの方々を学校に招き、各交流センターでの活動を共有したり、反省や来年度に向けた要望を聞いたりする時間を設け、意見交換を行った。	・来年度に向けてワークショップの内容、活動場所等を考えていく。 ・地域参観日で出た意見を取り入れた内容を考えていく。 ・すべての生徒が関わりがもてるようにワークショップの中での役割分担を考えていく。	A	・大変活発な活動を多数実施され地域とのつながりも良好であることを確認致しました。口コミで声がかかることが何よりですが、協議会の席上でもご意見ありましたが、キャバを超えるような対応はせず、順序付けをしまんべんく交流を深めて頂ければと思います。 ・生徒数の変動要素が大きいので、毎年同じことは難しいと思いますが実施するネタ集めは常に意識して頂き、数ある養護学校の中でも少人数ならではの魅力的な取り組みをされ他のお手本となるような活動を期待しています。	
	【教員】 ・生徒と地域の方がよりよいかかわりができる場を提供する姿	【教員】 ・生徒の実態に応じた活動や作業内容を工夫し、地域と協働することができたと感じた教員80%	100%	A					
寄宿舎	【寄宿舎生】 ・地域に対して役に立ちたいという意識が芽生えた姿	【寄宿舎生】 ・地域に対して役に立ちたいという意識が芽生えたか60%	夏祭り時 95% ドミナリエ時 92%	A	・昨年度に比べ、自分の考えを発信したり、主体的に活動に取り組んだりすることが格段に増えた。寄宿舎生へのアンケートからも「自分たちが地域の役に立つことができた。」「また役に立ちたい。」という意見も増え、舎生会役員の立候補者全員から「もっと地域との交流を進めていきたい。」という声があった。	・地域の方を招いた取組を夏と冬に実施した。冬の取組に関しては感染症や天候等の時期的な問題、または夜間開催という時間的な問題もあり参加者が少なかった。ドミナリエ（イルミネーション）は継続していくが、地域の方を招待して実施する取組は夏祭りのみ実施する方向で考えている。 ・今年度、評価指標に挙げた項目についてはある程度達成することができた。新年度には新入舎生が入ってくることで生徒の構成が変わる。地域との協働を経験し、成長した今年度の生徒が新しく入ってきた生徒を引っ張っていく流れを構築していきたい。	A	・成果を実感するとともに、その背景に交流センターなど外部機関との打ち合わせなどこれまででない時間が生じていたのではないかと懸念します。働き方改革との兼ね合いから、持続可能で継続した活動していくためにも、「地域との協働」と「働き方改革」のバランスが重要になってくると思われます。	
	【指導員】 ・お互いの活動に誘い合える関係を構築しようとする姿	【指導員】 ・地域への関心が広がるような活動が提案、実施できたか80% ・地域とお互いの活動に誘い合える関係ができたか60%	90% 60%	A	・寄宿舎生が「やってみたいこと」、地域の子どもたちが「寄宿舎でやってほしいこと」を活動内容として設定したことで生徒の意欲が上がった。活動意欲が出たことで、上述したような地域への関心を広げることができた。 ・地域が主催する行事のリサーチや参加はできなかったが、寄宿舎に招待するための地域との連携手段（渉外）を確立することができた。				
『働きやすい職場づくり』について			<ul style="list-style-type: none"> 令和3年度からの取組である。教職員へのアンケートを各年度で実施した。『松江養護学校は働きやすい職場ですか?』という問いに「そう思う、どちらかと言えばそう思う」の回答の割合はR3、R4、R5の順に73%、79%、90%と上がっている。負担や負担感誰しも必ずあり、無くなりはない。働きやすい職場となるには、達成感、満足感がそれを上まるかどうかが重要である。 令和3年度からの改善策として「成績処理週間の設置」「校外学習計画書のテンプレート作成」「公印の廃止（法的根拠のない文書等）」「個人会計の収入印支出額の廃止」「学校アシスタント学生ボランティアの活用」「マイベースの日設置」「復命書の簡略化」「家庭訪問の廃止」「年度投与の新年度準備金配布」「会議の在り方の共通理解」「教材教員指導案の共有」等を行った。これらがアンケート項目「日々の業務で負担に感じることとは?」「負担に感じる理由とは?」の問いの年度別回答に良い影響を与えた。 教材データの共有についても重要な策だが、今後さらなる検討や教員の意識改革も必要である。 働き方改革を進めるなかで、楽になる者もいれば、もう一方で誰かの業務が増える、ということでは本末転倒である。 働き方改革を進めるためには、保護者の理解も必要。理解が進みつつある今、丁寧に説明することが大切である。 				<ul style="list-style-type: none"> 『働きやすい職場か?』の問いに90%の教職員が肯定的な考え方をしており、校長を中心に学校全体で取り組まれた結果だと思う。 専門性の向上が課題であることとされているが、引き続き達成感が負担感を大きく超えるよう発展的に継続する今後に大きく期待をしている。 生徒の成長、教員の働き方改革について変化のスピードが素晴らしい。 業務が徐々に整理することは良いこと。それによって生じた時間や心のゆとりをどう活用していくか。 教職員間の意思疎通、コミュニケーションが大切。気軽に相談できる関係が必要。 改革がどこに向かうか何のためにするかそのために何をどうするのか、ということを考えていく必要がある。 業務を廃止して教職員が楽になった反面、生徒に何かしらのしわ寄せがきてはいけないうえ変更された後のフォローもしていただきたい。 働き方改革については教員だけでなく、事務職員等皆さんの声を聞いていく必要がある。 		